
異世界ヒーローキ

ルウさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界ヒーローリユーキ

【Nコード】

N0177X

【作者名】

ルウさん

【あらすじ】

「俺がここに来てからもう一年か」「なーんて感慨に浸ってるうちに、変態の汚名を着せられ王宮騎士の資格を剥奪された青年失われた住処に睡眠時間にetc、etcを取り戻すべく、青年は進む、異世界ファンタジー。」

一話：勘違い

僕は何十年か昔、身勝手な神様によって、異世界に飛ばされた。

説明すべき事は沢山あるのだろうけど今は割愛させてもらう。
いずれ話す時が来ると思う。

何故ここから話し始めるかというと、後から考えてみると異世界に飛ばされたときより光陽歴二百一年一月三日、このときが僕の人
生での一番のターニングポイントだったんだと思うからだ。

その日は僕が異世界に飛ばされてから、ちょうど一年と三日が経
ったときだったと思う。

僕の目の前には二日前に降臨したばかりの少女が眠っていた??。

さて、なんて声をかけるか。

前にはどこぞの王様が使うような儼かなベッド、その上にはすー
すーと寝音をたて一人の少女が眠っていた。

肩まで伸びた艶のある黒髪と整った目鼻立ちと、巨乳という訳ではないがバランスの良い均整の取れた体つき、身長は百六十センチくらいだろう。

その上、王の従者が着せたであろう純白のドレスがマッチして色気さえも醸し出していた。

「

」

思わず見入ってしまったから、自分が彼女を王宮で行われる歓迎会に出席させる為、起こしに来た事を思い出す。

「あゝ どうすりゃいんだよ……」

彼女は二日程前にこの世界に降りて来た俺と同じ地球人なのだが、転移のショックとやらで既に二日と半程眠りこけている。

この後すぐ、三十分程で彼女の歓迎会が王宮で執り行われるのでもう起こさなくてはならない。

先輩が言うにはもう起こしても大丈夫だそうなのだが、何とも起こしにくい。

我ながら情けない、けど仕方ない、仕方ない事としても、時間は刻々と過ぎて行く。

それにしてもだ。

まあ、あれだ、起こすのは百歩譲ってまだいいとしよう。

「だがそれからどうする」

起こした所で、彼女は混乱の極みに陥るだろう。

地球で何をしていたかは知らないが、いつのまにか気絶して気がついたら赤いドレスに着替えさせられていて、ベッドに寝かせられている。

その上見知らぬ男に起こされたとなれば、目の前の少女はどういう反応を示すだろうか。

最悪、悲鳴を上げ殴られてもおかしくない。
はゝと息を吐く。

「でも、悲鳴上げられて殴られるだけならまだ良いんだけど……」

今一瞬痛いとか、恥ずかしいとかそういうことならまだいい、しかし、その事によってなにかあらぬ誤解をもたれてしまうと、第一印象がが最悪になってしまうとか、そういうことは正直勘弁してほしい。

なぜなら彼女とはこれから何年も、下手をしたら一生付き合っていく事になるかもしれないから、その上これから当面彼女の面倒を看て行くのは自分な訳で、それが全て気まずい雰囲気になるのは御免だ。

以上の理由から俺は彼女を安易に起こせない。

「……………」

結局どうすれば良いんだ」

首をひねる。

「まずいまずいマズい……このままじゃいつまでたっても言い訳ばかり垂れ流してる優柔不断男になってしまう」

「なってしまうじゃなくて、もう十分優柔不断男だと私は思うよ。日高は」

いつのまにか部屋に入ってきたのか、この先輩は気配を消すのが得意らしい。

「どうしたんですか、夏南先輩？」

「毎回言ってると思うが、その先輩って言つのやめないか？」

トレードマークの赤髪を揺らしながら言う。

草原夏南、草原と書いてそうはら。

彼女は199代の降臨者だ、キリツとしたややつり目気味な目と俺と同じくらいの身長、赤髪が特徴の先輩である。

そして、道を歩いていてすれ違ったら十人中十人振り向く誰もが認める美人でもある。

「でも、夏南って呼び捨てにするのは少し親しすぎやしませんか？」

「いいよ、私は気にしないから」

「ふむ、先輩は俺ともっと親しくなりたいと、そして一線を越えたいと、そういうわけですね」

「いや、別に一線越えたくはないんだが」

「親しくなりたいの方は否定しないんですね」

「っ！」

…」

しまったというような顔を見ると、赤面しながら黙り込んでしまった。

そして赤面しながら、黙っている先輩を眺める。

ふう、和む

「ってそうじゃない、この子起こさないとー！」

和んでる場合じゃない、歓迎会までもう時間がない。

「そうだな」

「変に落ち着いている場合じゃないですよー！　　っとマズい。もう時間ないっ」

「

「そうだな」

「だから、何で変に落ち着いてるんですか！？　王宮主催のパーテ

イーですよ！？ 主役が遅れたなんて言ったら俺達がどんな罰受けるか！」

「俺達？ それは違うな日高。罰を受けるのは私たちでなく世話係のお前一人だ」

「つつ！ 裏切ったな先輩！！」

「何の事だか私にはさっぱりだが？」

「あれ？ もしかしてさっきからかったこと根に持って　ぐあつ、先輩いくら凶星だからっていきなりグーは無いんじゃない　ぐべあ　　」

もう一発入れられた、しかも強いのを。

「あーもう頼みますから先輩起こして下さい。同性ならまだましだと思いますので」

「いやだな。それは君の役目だ。自分の役目くらい自分で果たしてもらわないと困る」

「一回頑固モードになった先輩はもう手が付けられません！　よし！！　こうなったらもうっ……………」

ミッション1　遠くから声をかけてみる。

「お？い……………」

…　　ミッション1、失敗。原因
ヘタレ。

「 起こす気あるのか、日高?」
「 ありますとも! 見てて下さいよ、先輩!」
「 うん」
「 おー?い……」
「 ヘタレッ!」
「 誰が!」

ミッション3 ほっぺたに触ってみる。

「 ミッション3、失敗。原因」

シャイ

「 変態」

「 よーし、考えよう。もっと俺に適したやり方を!」

ほっぺたを触る。二の舞になる可能性を考慮し、却下。
ベッドを揺らす。力が足りなさそうなので却下。

再度声をかける。再度二の舞になる可能性を考慮し、却下。

身体を揺らす 却下。

顔をたたく 却下。

身体を触る 論外。

何か棒状の物でつつく バカ。

まともな案が出てこない。

「こうして和泉日高はうじうじと悩み続け、結局王宮騎士の肩書きを剥奪されたのでした。めでたしめでたし」

「変な回想入れるな！」

「回想ではない。現実だ」

「先輩、いつもにまして突っ込みが厳しい」

「はて、何の事やら？ 私にはさっぱり」

「やっぱり、さっきからかったこと根に持ってるんじゃないぐ

べあつ　ちょッ、先輩、刀はナシ、刀はナシでー！！！」

鞘から白銀色の刀身がのぞいている。

「いいから、さっさと起こせ！　ヘタレ日高！！」

「ヘタレ！？　あ、あー、やってやりますよ！！　起こせばいんでしょ起こせば！！！」

そう言っただけ俺は少女にかかっている毛布に手をかけた。

「おい！」

先輩が止めようとしているがもう遅い。

心を決め、目の前の少女にかかっている毛布を勢いに任せてひっぺがした。

その直後、襲って来たのは深い後悔。

目の前の少女が纏ったドレスは毛布の動きにつられたのか、スカ

一話：勘違い（後書き）

ついにやってしまいました。

始めてしまったからには少しづつでも更新して行きたいと思いき
すので、暖かい目で見守って頂ければ幸いです。

どんな小さな事でも良いので思った事があつたらご指摘ください。
感想をととても作者は待っています。

よろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0177x/>

異世界ヒーローキ

2011年10月14日03時17分発行